

第34期第6回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



令和2年12月22日（火）京都市総合教育センターで、第34期京都市社会教育委員会議の第6回会議が開催されました。「伝統文化の継承」をテーマに議論がされました。会議の模様をマナビィがレポートします！

■ 出席委員（17名のうち14名） ※五十音順

石川 一郎 委員，大澤 彰久 委員，片山九郎右衛門 委員，櫻井 寿美 委員，
鈴鹿可奈子 委員，園部 晋吾 委員，田村 穂絵 委員，豊田まゆみ 委員，
廣岡 和晃 委員，柁木 良子 委員，松岡 直子 委員，森 清頭 委員，
安成 哲三 委員，吉川左紀子 委員

第34期第6回社会教育委員会議次第

1 議 事

「伝統文化の継承」について

2 報 告

(1) 京都市次期基本計画のパブリックコメントについて

(2) 「京（みやこ）まなびいニュースレター」について

(3) 令和2年度京都市生涯学習市民フォーラムについて

3 主催事業及び刊行物の案内

■ 挨拶（在田教育長）

開会にあたり、一言御挨拶申し上げます。社会教育委員の皆様におかれましては、年末のお忙しいところ、御出席いただき、誠にありがとうございます。

コロナ禍にありまして、会場をこの総合教育センターに移させていただき、今回は新たにアクリル板を設置し、できる限りの感染対策を講じまして開催させていただいております。

今回はテーマを「伝統文化の継承」とさせていただきました。観世流能楽師シテ方の片山 九郎右衛門 先生からお話をいただけるとのことです。めったにない機会でございます。また、学校指導課の坪井首席から市立学校・幼稚園での伝統文化体験の取組についても紹介させていただきます。

例年、市役所の御用始め、1月4日に我が国の伝統文化の第一人者の皆さんに市長の年頭訓示の前に、伝統文化の一端を紹介していただいておりますが、今年は片山委員に「高砂」を御披露いただきました。片山委員の先導に沿って、市の職員が拙く朗詠するわけでございます。なかなかうまくいきませんでした。伝統文化に触れさせていただいて、気持ちも新たに新年を迎えることをお世話いただきました。

生活の中で伝統文化に接する機会は本当に減ってきております。国際化社会の中で、日本人の心、京都の伝統文化を知って、子どもたちが伝えていくことはますます大切になっていきます。私たちが家庭や地域、学校でできること、生涯学習の現場でできること、様々

あろうかと思しますので、委員の皆様の御経験を踏まえて、御提言をいただければ大変ありがたく存じます。

京都市では11月17日から年末までを「京都市コロナ感染防止徹底月間 第2弾」といたしまして、感染拡大の防止に向けて取り組んでおりますが、先週ぐらいから感染の拡大が続いております。市民の皆様や事業者の皆様に必要な感染対策の実践と徹底をお願いしておりますし、また、昨日からは夜9時以降の営業を自粛していただくということで大変な御苦労をおかけしております。やはり一人一人の実践が何より大切だと考えておりますので、市役所総体として市民の皆様、事業者の皆様をお願いしていきたいと思っております。

また、学校におきましても、先週ぐらいから感染者が続いております。昨日、一昨日と2日連続、感染者がなかったんですが、残念ながら本日は感染者が出ております。陽性者が出た学校につきましては、疫学調査を徹底し、また、消毒をしたうえで濃厚接触者以外の子どもや教職員についても幅広くPCR検査を実施しまして感染拡大の防止に努めております。

また、図書館につきましては、先日報道もございましたが書籍の消毒機を新たに設置いたしました。図書については不特定多数の方が手にされるとということで、非常に気にされる方もおられます。やっと消毒機を設置することができまして、1分間に3冊ほどではありますが、気になる方は消毒をしていただくことが可能になりました。中央館4館については夜8時半までの夜間開館を実施してございましたけれども、こういう時期でございますので、夜7時まで短縮をしておりますが、一度の貸出冊数を増やすことで、できるだけ市民の利便性が低下しないように努めております。様々なかたちで感染防止対策をしながら、社会・教育・経済活動の維持に努めているところでございますが、どうぞ皆様の御理解と御協力をお願いいたします。それでは、本日もよろしく願いいたします。

■ 34期社会教育委員自己紹介

○ 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

能楽の片山 九郎右衛門と申します。コロナ期ですけれども、そのためにソーシャルディスタンス等いろいろなことを実現するため、かえって儲からん仕事ばかり増えていると思っていただいたらよいかと存じます。「貧乏暇なし」を続けておりまして、欠席が続き、大変申し訳ございませんでした。今後ともよろしく願いいたします。



■ 議事 伝統文化の継承について

○ 事務局より

- ・今回、協議題を「伝統文化の継承」とさせていただきました。
- ・文化については、直接的には文化市民局が所管しているが、社会教育委員会議では、文化に関わりの深い皆さまにも委員に就任いただいております。大切なテーマのため、議題とさせていただきました。
- ・伝統文化に触れる機会が少なくなる中で、私たちが「家庭・地域・学校でできること」「生涯学習としてできること」など、皆さまのお取組も紹介いただきながら、御意見をいただきたい。

- ・まず、片山 九郎右衛門 委員にお話いただき、その後、京都市立学校・幼稚園の取組について、教育委員会 学校指導課 坪井 首席指導主事から紹介させていただく。

○ 報告者 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

「伝統文化について何か」ということでございましたので、お話しをさせていただきます。皆さんと同様に、本当に今回は思いもかけぬことで、いろいろ手探りでどうやって続けられるかな、ということを考えております。



まず、2月の末に新型コロナウイルスの感染が少しずつ始まりました頃に、情けないことですが、私も1ヶ月もすれば収まるのではないかと考えておりました。ただ感染を拡大させてはいけないので、能楽堂の京都観世会館は岡崎地区にあります。館とも連携して自主的なロックダウンをしようということで、公演の中止を各方面、自分たちの自主公演だけでなく貸し館のものも含めてお願いをできるものはお願いをして閉じていきました。3月には金沢で会を引き受けておりましたので、中止のお詫びで金沢まで行ったりする悠長さでございました。そこから一気に全て失いまして、半年ぐらいほぼ何もせずとやってまいりました。その間、全く何もしていなかったわけではありませんが、皆さんとお目にかかって実際に公演をすることの大切さをいろいろな意味で思い知りました。

今回のテーマの伝統文化をつないでいくために二つ必要なことがあると考えています。一つはやる側の伝承の問題。もう一つは見てくださるお客様や社会の伝承の在り方の問題。これは一緒くたにできないな、と考えております。作り手が見てくださる側にあまりに寄ってしまいますと、不思議に出来上がりません。ですから、やる側の人間を育てていく。そして見ていただく側の方、これは私たちの口からは育てるなんて言い方はできないので、一番手を出しにくいゾーンではあるのですが、忌憚なく申し上げますと「ものを見ていただく癖とか機会」を持っていただくために、そして本来は皆さん一人一人が自分なりの見方で感じていただいたらよいのですけれども「自信を持って、ものを感じていただく、感じていただく」ための手助けがどうやら必要になってきている。伝統芸能や伝統文化の享受者であられる観客の皆様と、今のテレビ世代の方々が育ってきた感受性というのは、大胆な発言になりますが、ちょっと「ずれ」があるように思います。

この十数年、小学校、中学校へ出前のようなかたちで年に20校ずつぐらい各地を回りました。一番南は与論島から北海道の北部までずっと、大きな学校から小さな学校まで回ってきました。今年も行ってまいりました。特に小学校4、5年の方々に伝えるのは正直に申しまして得意です。なぜかと言うと彼らは体験していく中で、どんどん自分なりの見方や興味というものを発見していってくれます。そして、まずチームワークが良いです。これが中学生になると、急に同じ集団でありながら引っ込み思案になられて周りの視線をいたく意識するようになる。なかなかものが伝えにくいのですが、それでもほぐして、ほぐして、舞台、芝居、そういうものを見るってということがもっと「自分が参加すること」なんだ、というふうに思っていたときに、観客としてどんどんと成長しだしてくれるんだな、とすごく思いました。

実際にどんなことが起こるかという、当日、私たちが実際に演能する、ある一部分を

一月前ぐらいに稽古に行きます。そんなに長い時間やるわけではないです。特にこの状況でソーシャルディスタンスのこともありまして、やれることは限られているんですけども、仮に舞台の上を一周回るとか、少し離れていても謡を一言、二言でも口ずさんでみるとか、舞台の上をドーンドーンと踏み鳴らしてみるとか、本当にさ細なことなんですけど、そういうことをやってもらいます。そして、自分たちがやった一部分が、観客側になって実際に舞台を見たときに、出てくるということがあったときに、それまで20分もたらずに眠りの国に行ってしまうていた彼らが急に覚醒して参加意識が自然に高まって行って舞台を見ている。「これがやっぱり舞台なんだな。」と「お客さんって、こういう意味でうれしいな。」と思って見ておりました。そういう育て方しかお客様に育てていただくにはないのかな、と。その間をどうにかして、今後はリモートという形でつないでいく方法はあるのかな、と。この間から試しているのが現状でございます。ただ、ソーシャルディスタンスのこの時節ではございますが、どこかで実際に舞台を見ていただく機会を少しでも隙間をねらって届けていくことが何より大切なんだと実感いたしました。

今も医療関係の方々がこんなに頑張っていたいただいているときに、こういうことを言って誤解を受けるといけないのですが、無理なことをするのではなく、一番落ち着いているときに、そういう機会をまずは学校のような教育機関が積極的に受け入れていただくことが必要だな、と。これを危ないからと、全部やめてしまって、この期間、全くそういうことをしないと、この時期の生徒さんは永遠にその機会を失ってしまうのではないかと心配しております。



もう一つの柱、我々のやる側の伝承ですが、これは能に限らず古典芸能、伝統工芸の方々もそうですが、今まで常に後継者不足にどこも悩まされています。何が一番の原因かといえば「人気がない」と継ぐ人間はまず思うのではないのでしょうか。自分がこれからやろうとしている仕事、お父さんお母さんがやっている仕事が世間的にどれぐらい受け入れられているか自信があるかないかはとても大きな問題だと思います。それをなんとかしていかないといけないな、と。

これは逆にこの期間内に考える時間はありましたが、私たちが「見てもらってからのこと」しか考えていなかったという反省がありますので、もっといろいろなメディアを通じて「知ってもらおう」努力をしないといけないな、と痛切に感じました。知ってもらうためには国内だけではなく国外の人にも「これ、なに？」と興味を持ってもらえるように、特にネットでの配信は、それを考えた映像を残さないでだめかな、と。例えば思い切ってPV（プロモーションビデオ）のかたちにしてしまってインパクトで見る側の心をつかんで、それからどんどんと、次の扉、次の扉と近付いてきていただく。そういう方々が身近にあるということが、これから伝承をしよう、されようという若手にとっては一番の味方になるのではないかと、というのが、まず一点です。

それと能の場合でしたら、アクター、役者、囃子方（はやしかた）を含め、いろんな役者がおりますが、その伝承だけでは成り立たない。やはり道具立ても必要であります。扇もそう。衣装もそう。装束（しょうぞく）と私たちは申しますが。その作り手さんたちの

生活や文化も一緒に背負って一つの共同体として出来上がっている。このコロナ禍でありがたかったのが、京都の方々がそういうことを考えていただいて応援してくださいました。そのバックグラウンドには、なにがしか、伝統工芸、伝統文化、伝統芸術といったものに、どこか共通項を持っていると思われる方々がシンパシーを感じ、寄ってきて支えていただいたということがあります。ただ、この環境は京都にしかないのかも知れません。別の土地で声高にこういったことを言ってしまうと反発を受けるかもしれません。なるべくひそやかに京都の良さを享受したいと思っております。でも、本当にそうでした。この期間、ものを修理したり、作ったり、ということは非常に難しかったのですが、職人の方々とつながりに大いに助けられました。そういう意味で、本来の言葉の使い方とは違うかもしれませんが、私のやっていることはトータルシアターなんだな、と感じました。自分たちだけでは出来ない。そういう組織力、そして連携、チームワークの良さが成り立ったときに、伝統芸能というものはつながっていくのだと思いますので、あまり専門的なことばかりをミクロに追いつけて伝承を考えても続かないと、今回、すごく思いました。では、ミクロではないことは何かと言ったら、毎日、毎日ずっと稽古を続けていく中で、経済的にも立場的にも一番落ちこぼれていきそうなところを、スピードをうまく合わせて一緒にやって、人数を減らさないということがひょっとすると伝統芸能、伝統芸術、伝統工芸のこれからはばらくのスタンスになるのではないかと思います。上手な人だけがよいというものではないと痛切に思いました。人数を確保しないと絶対できない。心底思いました。

それと、もう一つ。催しをやる上で、ソーシャルディスタンスの問題で痛い目に何度も遭いました。その都度、特に能なんかは室町から続いているという自負とか権威的なところがございまして、はっきり申しまして京都だけで公演を続けようと思っても東京の方から横槍が入ってきたりいたします。それを払いのけながら、その時のその日を迎えるに当たっての正しいことを考えながらやっていかないと、1ヶ月も前に決めたことを遵守するために拘泥しては絶対できないなと思うんです。2週間でも厳しい。願わくば一両日の間に、再度思ったことを、これしかないなと思わずに、この方法でいって、もしだめだったら次の方法と、保険をかけながらやっていかないと、この時期は無理だなと思いました。

そこで最終的に「伝統、伝統、と言っているけれども、私たちのやっていることで本当の伝統というのはどんな部分だろうな。」ということを考えさせられました。おそらく、「マスクをして舞台上上がるのは始まって以来ない。」というようなことを云々(うんぬん)するのではなく、もっと実は目に見えない風みみたいなもの、匂いみたいなものを、きっちり「こんな匂いだったよ、こんな風だったよ、習ったものは。」ということを大切に次に送っていく。そういうことが「伝統」というのではないかと。それが残れば、他のものはどんどん飛躍していても構わないのではないかと。最終的に私たちはもう、盛りの芸能ではありません。古典芸能というのはそういう意味で、過去の感覚みみたいなものを保存していく、そういう部分も大切です。それは「ものの哀れ(あわれ)」という言葉に尽きるのかもしれませんが、手を添えないと滅びてしまうかもしれないような、危ない罅際をずっと落ちずに歩いていくようなものだと思うんですけれども、その危うさというものが私たち古典芸能の持っている美しさでもあり、妖しさでもあり、ひいては京都の持っているいろいろな価値観というのは、そこにあるのではないかと思います。滅びそうで

滅びないでいる。それと新旧いろんなものがそろっている。京都における伝統と革新の組合せというものが、他の都市より京都をきらっと光らせるものがあるとすれば、そういうものなのではないか、と思いながら、この半年ほど「そんなことやったことないよ。」という言葉が散々耳にしながら、続けさせていただきました。

何だかまとまらないお話をしてまいりましたが、お約束の時間にたどり着きましたので、この辺りで終わらせていただきます。ありがとうございました。

○ 配布資料 「～京都に息づく～伝統文化体験」

報告者 坪井 聡 首席指導主事（京都市教育委員会 学校指導課）

私からは京都に息づく伝統文化の体験について、京都市の取組をお話させていただきます。京都市立学校ではNPOや地域団体等と連携し、伝統文化に関する多彩な体験活動を行っております。特に「古典の日に関する法律」や文化庁の全面移転を契機に様々な伝統文化を生活文化として定着させ、その振興、継承を図り、次代の担い手を育む機会を創出することを大きな目的としております。本日は主な取組について御紹介させていただきます。なお、本年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、縮小、休止した取組も多くございますので、あらかじめ御承知おきいただけたらと存じます。

■ 全市立小学校での茶道体験、全市立中学校での華道体験



全ての児童、生徒が中学校卒業までに小学校で茶道、中学校で華道を体験する取組みです。女性会をはじめ地域の諸団体、京都いけばな協会等の協力を得て、令和元年度から始め、計画的に実施校を増やしております。家元等の指導のもと、本物の道具を使用し所作、礼儀、道具を大切に扱う心、草木の命、風興（ふうこう）を学んでいます。また、体験活動の前後には道徳の授業を関連付けることで、体験で得た学びの深まりを目指しております。

■ 外部専門家等の派遣・体験

産業観光局や文化市民局との連携のもと専門家を各校に派遣し、体験活動に取り組む事業です。

・ 京の技専門家派遣事業

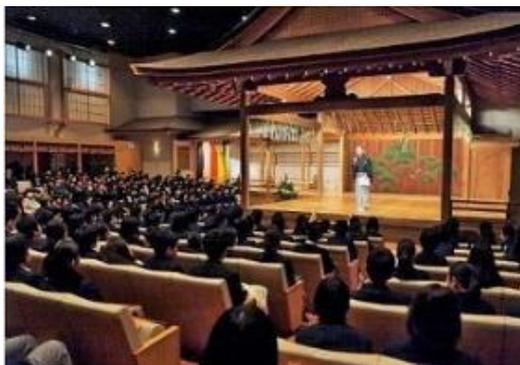


「古典の日に関する法律」を契機に家元、師範の先生等専門家に学校にお越しいただき、浴衣の和装指導、日本舞踊、琵琶等の和楽器、邦楽、書道、陶芸、西陣織、京くみひもの制作等、幅広い分野で体験活動を行っております。なお、本委員であられる片山九郎右衛門様、榎木良子様にも例年、市立学校で能楽教室や浴衣の着付指導でお世話になっております。この場で御紹介と御礼を申し上げます。

スライド写真の一つは榎木様御自身です。片山様のお写真がなかったため、能楽教室は他の方の写真で様子を紹介いたしております。申し訳ございません。

伝統文化以外にも声楽、バレエやモダンダンス等の洋舞、演劇、漫画等舞台芸術や美術造形に関する体験活動も各校の希望に応じて実施しております。

- ようこそ和の空間



また、中学生を対象に観世会館、金剛能楽堂の本物の舞台上、能楽、狂言、日本舞踊を鑑賞する公演鑑賞事業です。出演されるのは全てプロの方で鑑賞の前後には国語科や音楽科と関連付けて教科の学びが深まるように各校で工夫をしております。

- 中学生の能楽大連吟（のうがくだいれんぎん）



有志の大人の方が年末に「高砂」の謡を大勢で合唱することから始まった能楽大連吟の中学生版として観世流、金剛能楽流の能楽師の方にお稽古をつけていただき、生徒たちで雅楽の舞台を完成させる取組です。昨年度は希望する5校から140名の生徒が参加し本番発表は感動的でありました。参加生徒は生徒会役員や吹奏楽部員が多かったですが、中にはラグビー部やサッカー部の生徒も参加してくれました。

- 京都三大祭（葵祭、時代祭、祇園祭）の見学



京都の三大祭りにおいて特別の観覧席を設けていただき、幼稚園児、小・中学生が身近に見学する取組です。祇園祭の山鉾巡行や時代祭の行列には地元の小・中学校から出演者側として参加する児童・生徒もいます。

- 京都市交響楽団のコンサート鑑賞
 - ・ 幼稚園大会での親子コンサート
 - ・ 小学生のための音楽鑑賞教室



京都市交響楽団によるオーケストラ演奏を鑑賞する機会として幼稚園、小学校を対象に京都コンサートホールやロームシアターで公演鑑賞事業を行っています。曲目は園児や児童に分かりやすいものを選んでいただき、園児は親子で参加する形式です。小学校の鑑賞教室は民間企業から多額の寄付を頂戴するなど応援をいただいております。

- 日本料理に学ぶ食育カリキュラム



京料理店の主人等で組織される日本料理アカデミーと協働し、だしのうま味などを体験する京都ならではの食育授業を実施しております。スライド写真は本委員の園部晋吾様が小学校で指導いただいている様子であります。園部様には小学校の食育指導の中心的な役割を担っていただいております。ありがとうございます。

- 和（なごみ）献立



また、月1回程度、和食推進の日として学校給食で伝統行事にちなんだ献立や和菓子などを提供しております。スライド写真は、たけのこごはんとかしわもちになります。

- 全市立高校での茶道・能楽鑑賞等



高校においても在学中に2回以上の伝統文化体験を行えるよう、各校で茶道体験や金剛能楽堂での能楽鑑賞等を行っています。小・中学生を対象にする公演は有名な話や分かりやすい演目で実施していますが、高校生にはより内容の深い演目を選んで実施しております。

■ 総合支援学校への芸術家派遣等

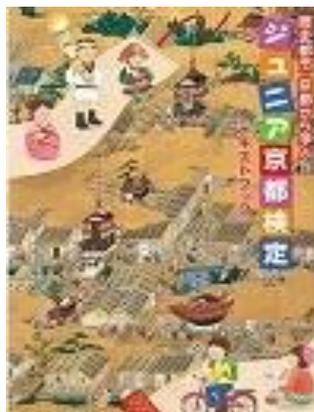


総合支援学校へは、美術家等で構成されるNPO法人と連携し、総合支援学校に専門家を派遣いただき、障害の種別等に応じた、美術や造形の体験活動を行っています。NPOや地域の方々の御協力のもと、子どもたちの作品を学校玄関に飾るといった工夫もごさいます。

■ 文化芸術による子供育成総合事業（文化庁）

時間の都合上、詳細は控えますが文化庁によって芸術家派遣や体験機会の創出といった様々な事業が行われており、本市の学校も多くが申請、実施しております。文化庁の事業は費用面で補助があることに加え、文化庁を通じて関西圏以外で活動されているNPOとのつながりが持てることもメリットの一つです。

■ 副読本「わたしたちの伝統産業」



主に社会科の授業の中で、京都の伝統文化を学ぶため、平成6年度から京都の伝統産業に関する副読本「わたしたちの伝統産業」を現場の先生方と産業観光局、教育委員会の連携で作成し、小学校、総合支援学校の4年生に配付しています。また「ジュニア京都検定テキストブック」も子どもたちの興味、関心を高める教材

となっています。

最後に本日、御紹介した以外にも各校で地域との連携のもと、例えば藍染めの体験、祇園囃子（ぎおんばやし）体験、六斎念仏、百人一首、相撲教室など地域の特色をいかした取組が行われています。また、中学校の音楽科では全校でお琴を使用した学習活動も行っています。歴史都市京都の有形無形の優れた文化を守り、次代へ継承していくため学校の間においても子どもたちにしっかり伝え、体験をとおして学ぶ機会を創出することが大切だと考えております。引き続き幅広く地域の皆様に御協力をいただきながら、今後も取組んでまいりたいと存じます。

○ 事務局より

- ・配付資料に本日、御欠席であるが佐竹 美都子 委員が伝統文化の継承について市長と対談されているものがあるので御参照いただきたい。
- ・また園部晋吾委員が文化市民局実施の「親子でチャレンジ！京のお雑煮づくり」の事業において京のお雑煮レシピを動画で公開されている。資料についても合わせて御覧いただきたい。

- 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

片山委員，坪井首席，御説明ありがとうございました。

片山委員と事務局の説明を受けまして御意見をお願いいたします。伝統文化を継承するために私たちが家庭や地域，学校等でできることを委員の皆様の取組も含めて情報交換，御紹介をいただければと思います。

最初に，本日，御欠席の佐竹 美都子 委員からメッセージをお預かりしていますので事務局から御紹介ください。

- 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役，アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

第6回の会議に参加できず申し訳ありません。「伝統文化の継承について」と議題にあり不参加が残念でなりません。資料を拝見いたしました。私は現在，取り組まれている能楽の鑑賞，茶道の体験などを京都教育大学附属小学校時代に経験させていただきました。当時，公立学校とは違う取組であったように記憶していますが，その取組については現在に至るにあたり非常に貴重な体験であったと思います。

今は家業である西陣織の制作，和装文化の普及に携わっていますが，三兄妹の末っ子で兄妹誰もがこの仕事をしていませんが，大学卒業後，銀行員を経てオリンピック後，現在に至っています。また，プライベートでは観世流の稽古もさせていただいています。

家業であっても継がない人もいれば，継ぐ人もいます。また，家業でなくても興味からその世界に入る人もいます。環境や時代，情勢が変わる中，人それぞれの選択があります。どのような関わり方であっても，その根底には知るきっかけがあります。伝統文化は発信することと，共に支える受け手がないと続きません。近くに感じた人が発信し，共感と興味を持つ人がつなげることにより続き，残されるものであると感じています。立つ場所は違えど共にそれを信じ前に進む人がいることで発信する側に立つ力をいただいたり，またその気持ちが分かるから受け手になることもあるように思います。かたちは違っててもそこに共感，共鳴があることが日本文化の魂の継承となり残されていくのだと思っています。

現実的なことからすると，必要でないことかもしれません。ですが，行政の御協力，文化庁のある京都からしか発信できないこともあると思います。日本人が国際人として日本らしさを知り，体験し，楽しむ根底を作ることは必須です。現在の日本文化，工芸を知るきっかけが全国的にできることを心から願っています。

- 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

伝統文化の継承ということで，このコロナ禍の中で，どのように実践をしていったらよいのか。どういう心構え，視点で考えていくのがよいのか。どうぞ御自由に意見を聞かせていただけたらありがたいと思います。

先ほど，片山委員から実践する立場からの見方と，それを受け止める側，その両方が育ち合い，関わり合う中から生まれるものがとても大切というお話がありましたが，実践する側として柁木委員いかがでしょうか。



○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

先ほど御紹介いただきましたが、京都市立高校での着物の文化を伝える授業が今年で16年目になりました。コロナの影響で例年6月頃に実施していたのですが、それは一旦延期になりまして、ちょうど先月、11月に行いました。

16年前に私が京都に戻ってきまして頃は京都のまちで着物姿の方は見かけませんでした。今現在は旅行者の方々がレンタル着物を着てまちを歩いておられますが、20年ほど前は姿を消している状態で「これはいかな。」と思いました。今回、取組の御説明がありましたが、学校教育の中で足し算、引き算、ひらがな、カタカナを習うように着物についても知ってほしい、着なくてもよいから、まずこういうものがあることを知ってほしい、ということで始めました。



当初、5年ぐらいは無償のボランティアでやっていたのですが、おかげ様で16年間続けてきまして2,000人以上の生徒に伝えることができました。続ける中で、なぜ、それを頑張ってきたのかと言いますと、受け手の生徒さんたちの反応が思いのほかよかったということです。浴衣を着ることをとおして、その先にそれを作っている職人さんがいるということ、また、それを着ているいろんな文化が京都にあること、先ほどあったようにお祭りであったり、いろんなところに着物に携わっている人たちがいることを伝えていきます。それを言うことによって、また着ることによって、彼らは「日本人でよかった。」「京都のこの文化を保護していかないともったいない。」と姿勢や言葉遣いまでよくなります。好印象なんですよ。今まで16年間2,000人以上と関わってきましたが否定的な意見は一つもありませんでした。そこに関しては頑張ってきた自負があります。高校生という多感な感受性の強い時期の男女に、体験してもらうということは非常にやりがいもありますし、投げかけたらキャッチしてくれる、受け止めてくれる反応を感じております。

私が思いを抱いて始めたことが、こういうかたちで小・中学校にも広がってきてよかったと思います。私も元気な間にお役に立てればと思います。最近は高校での授業に私の大学の学生もお手伝いで一緒に行ってもらうようになりました。留学生も手伝ってくれます。これは双方にとって刺激的なんですね。お互い勉強になったと言いますし、大学生が来てくれるとか、留学生が来てくれると喜んでいただいています。それに対して市教委から大学生にボランティア謝礼をいただいております、私も助かっています。

京都の土地柄をいかした文化はたくさんあります。私は着物ですけれども、華道、茶道、能楽、いろいろあります。それを地道にやっていくことしかないのかと思っています。私は平地を耕して種をまくところまでやって回る。そこから芽を出して、花を咲かせてくれると非常にやりがいがあります。着物業界に就職した学生もいますし、留学したときに浴衣を持って行ってホストファミリーに着せてあげたら喜んでくれたというエピソードを学生から聞くとよかったなと思います。何よりもそういうことを地道にしていくことですね。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

長年の努力下、少しずつ着物文化が根付いてゆくというか、広がりが感じられますね。

それには、京都という土地柄があるのか、日本全国どこで試みても同じようなインパクトがあるのか、どうなのでしょう。片山委員は全国の学校で能の御指導をされたとき、京都ならではとか、その土地柄とか感じられることはありますか。

○ 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

私たちは京都から来ましたと説明はするのですが、地域性という部分では、古典に触れたこともなければ、能なんてもっと触れたことがない、校長先生が挨拶で「先生も見るのは初めてだ。」とおっしゃる。ありがたくないのが、その先で「これが最初で最後になるかもしれないから、よく見ておけ。」とよく言われることがあるのです。「最初で最後にならないために来ているんだけどな。」と思いながらアプローチするところから始まります。そして現代の世の中で私たちの職業なんて妖精みたいなものでして、皆さんが目を向けてくれないと吹いてなくなってしまうようなものです。けれども何かこうシンパシーを感じてもらおうということをやろうとやっていきたいと思ってフラットな気持ちでやっています。そこには京都ということはないんですけども。ただ、京都に帰ってくるとほっとするのは、自分たちが肩の力を抜くことのできる空気とか、受け入れてくれる空気とか人がたくさんいるということありがたい。私が常々思っているのは「京都にしかできん」という言い方はあまりしたくないですね。むしろ他の地方からいろいろなものを京都目線で寄せてきて、いろいろなものを再発信することができる国際性みたいなものを、国内でもよいのですけれども、京都が持っていれば、京都の価値は必然的に上がってくるのではないかと思います。それぞれの、自分たちが京都人として息づいている生活の中から割り出すものを、そんなに気負わずに体現してもらおうということがむしろ大切で、本来京都というのはそういうまちなのではないかと思っています。

○ 田村 穂絵 委員（市民公募委員）

貴重なお話をありがとうございました。私は、実はこの写真の中にある華道体験の生け花セットを、今、勤務している中学校で大急ぎで準備をした経験があります。小学校と同じ場所にある学校に勤務しているのですが、小学校から散発ではなく継続的にお世話になっていて、子どもたちが教えてくださる先生を師匠と呼んで毎回「今日は師匠が来る日や。」とか廊下で話している関係はすごくよいところだと思います。私の出身地では、そういった場面はなかったので京都ならではのことで感じていました。そういう豊富で多様な文化があるところがぜひいたくなことだなと個人的に思うところで、またそれが学校の教員にとっても子どもたちが学んでいる姿というのを、普通の教科ではなくて、まあ、英語と数学とかやっているよりはもちろん楽しいとは思っているので、キラキラした目で学んでいる姿を改めて教員が外から見ることによって、新たな発見ができるという意味で学校にとってよいフィードバックになるのかなと考えています。



個人的なことになるのですが、私の所属している大学は京都の大学なので、友人の中には観世流や金剛流の能楽のサークルに入って実際に自分が演じるところまでやっている学生もいるので、そういったかたちで小学校、中学校でやってきた活動がつながっていけ

ばよいのかと思いました。

○ 鈴鹿 可奈子 委員（株式会社聖護院ハッ橋総本店専務取締役）

私が感じたことや自分の体験や経験を踏まえて、今、お聞きしたことと文化体験にまたがる話ですが、先ほど片山委員がおっしゃったように先生でも見たことがない方がいらっしゃるということで、日本の伝統芸能の世界は京都だとまだ見た人がいるかもしれないけれども、おそらく地方に行けば行くほど見たことがないという親世代の方が多いのかな、と。昔だったらそれは家庭の中で教えてもらったら、ということが期待できないので、本当に学校というのが一番の場所になるのかなと思っています。その中で、おそらく初めてだったら、「ちょっとよくわからなかった。」ということも小・中学生だったらあると思います。そう思っても、私はよいのかなと思います。そう思う人がいても、とにかく将来、例えばお能でしたらお能という言葉を見たときに、「実は小学校の頃、ちょっとろ覚えではあるけど見たことはあるんだよ。」というのと、「お能ってどんなだっけ、こんなふうだったかな、わからないな。」それよりもっとひどくなると、「お能って何？」ってなってしまうのが、一番困ると思うので、どんなかたちであれ、全ての市立学校の人が触れたことがあるというのはとてもよいことだと思いました。これは着物も同じで、見たことがある、着物というものは何か知っているというのと、着物は日本の昔の服だけれども買ったこともないし、家にもないから見たこともないというのでは大違いなのではないかと思っています。



やはり京都というのはほかの地域とは違うと言うと反感を買ってしまうかもしれませんが、特にこのコロナ禍、あまり京都から出られずに京都で過ごしていると、歩いて感染予防しながら見て回れるところにいろいろ歴史的なものがあったりとか、また芸能のものもあったりするので、やはり京都のありがたさというものを改めて知ることができた期間かなと個人的には思っていて、前向きに考えたら、この期間で地元のよさを知った方は多いのかなと思っています。その中で、じゃあ、これを勉強してみたいというふうに見える方も多いと思うのですが、先ほど片山委員がおっしゃっていた、今、実際の公演ができなくてインターネットでの配信とかいうかたちになったときに、やはりそのかたちに合わせたものにするということが大事だと思うんです。舞台では何時間も、その迫力もあるので見られていたものが、画面で見るとちょっと飽きてしまうというのもあると思います。リモートで会議をしていると、集中力がどうしても途切れてしまうことがあるように。枠にとらわれず、どんどん「コロナが終わって公演があったら見に行こう」と伝統芸能もなったらよいと常々思っています。

これは私の娘の話になるのですが、ちょうど2歳を迎えているいろいろなものを吸収しているところのようで、日々発見があります。テレビで歌舞伎とか浄瑠璃を子ども向けに楽しく、でも節回しなんかは本格的な番組があり、私も一緒に見ていると、その音が流れると好きみたいでテレビに寄って行って、歌舞伎の型とか一緒にしてるんですね。こんな小さい頃から見ていると好きになるもんなんだな、おそらく実際の舞台を見たら結構楽しいんじゃないかな、と見守っています。最初にそういう情報があったら堅苦しくないよ、とわかるので、お能も本当にそうだと思います。

片山委員もよく御存じだと思うんですが、園部委員や私と一緒に「DO YOU KYOTO? ネットワーク」に入ってらっしゃる橋本 忠樹 さん（能楽観世流シテ方。片山 幽雪 氏、片山 九郎右衛門 委員に師事）は子ども向けに紙芝居でストーリーを説明してから実際に演じるそうです。こういうストーリーだからここが見どころだよと説明しておけばわかる。昔の人はそれがもともとの知識としてあったから、今の若い人にもそれを紹介してから見てもらう、と。そういうのがもしネット配信とかでいろいろな伝統芸能が出てきて、さらに理解が深まって映画を見に行くのと同じように伝統芸能にずっと入っていけるようになったらよいなと、伝統芸能が好きな一人として思っております。

○ 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

ちょうど今、鈴鹿委員がおっしゃったことで、私も言い忘れていたことがあって、私のお弟子さんなんですけども、橋本 忠樹がやっていることをもう少し大まかにしたのが文化庁の青少年のための「本物の舞台芸術体験事業」というのが元々の名前なんですけども、もう12年ほど承っていて、この事業をするのに徒手空拳では難しいので絵本をもう10冊ぐらい作っています。作るときに出版社と話をしまして、原画をそのまま映像でスライドする権利をこちらで持って、それを見てもらって、体験と実際の鑑賞ということを組み合わせてやっています。最後に質疑応答して、それを学校の2単元にきっちり収めて、何かができるか、ということをして回っています。来年からは九州地方を3年間回ることになっているので、残念ながら京都では回れないのですが、やはり一番最初の文化庁の公募に積極的によいものを選んでいただくと体験が一番よいのかなと思っています。思わぬ効果がありまして、こういうことを言うと怒られるかもしれませんが、ある学校に行ったときに、頭を黒と白に染め分けた女の子が校庭で自転車を乗り回していたんですね。体験授業が終わって、帰りがけに「おい」と、その女の子に呼び止められて、ピクッと立ち止まったら「お前、今日はよかったぞ。」と声をかけられました。先生方は慌てていましたが、芸能の効果というか、そんな思いもしないところで、自分たちも参加できることで、シンパシーを感じてくれるんですね。

それともう一つ、鈴鹿委員が京都のよさをおっしゃってくださいました。先ほど「京都にしかできん」という言い方はあまりしたくないとは言いましたが、もっと京都に皆さんを引き寄せることはしないといけないと思っています。映像配信でもただただ、垂れ流すんじゃなくて見栄えのするものを作らないといけない。例えば京都ですから、神社仏閣は特に今、人がなかなか来ていませんから、そういうところと組み合わせたものを、映像産業の盛んな土地でもありますので、今のうちに京都市さんで作っていてもよいのではないのでしょうか。配信事業の著作権については文化庁にも関わってもらって、新しい時代の配信における著作権の処理の仕方については、それこそ「京都モデル」で作ってしまえば、もっとできることも増えてくると思います。四角四面ではなくてフレキシブルなものを京都で考えていくということは小さいまちですのでできるのではないかと考えています。

○ 森 清頭 委員（清水寺執事補、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

今おっしゃいました権利関係に関しましては、映像というのは本当にややこしくて、どこかのお寺が裁判にまで発展されたということがありまして、権利関係のことには強

制力を効かせていただきたいと思います。と思うところでございます。

今、お話を伺いながら演者側と観客の関係性というのはおっしゃるとおりだと感じております。我々の世界においても例えば今回、清水の場合でしたら、舞台の屋根のふき上げや板の修復をさせていただきましたが、技術伝承というものが大変難しいということや、着ております衣につきましても和装と同じで作り手がいなくなってきたり、材料がなくなってきたりすることがあります。五条袷染の白い紋の刺繍なんか「おばあちゃんが亡くなったからできひんかもしれんで。」と言われたりする時代でございます。今までは衣屋さんをお願いするだけでよかったんですが、その先の縫い手、刺繍や染めとかのところからだんだんとしんどくなって辞めていくということで、一箇所がなくなると全部ができなくなってしまふ。お能の衣装もそうだと思いますが、まさにそんな危機に瀕しているところでございます。一つは需要がなくなってきたということがあるのかもしれませんが、今後の需要というのもそんなに変わらないのしょうけれども、例えば羽二重にしても昨年でしたか、新潟の五泉の機屋さんの工場が3、4軒、一気になくなって羽二重が作れなくなって、お茶の袱紗（ふくさ）が出来なくなって、生地屋さんが探し回ったということでした。



関連するようなことが他にもたくさんありまして、日常生活のちょっとしたものが、生活が変わることで使わなくなってきました。例えばナイロン製品のようなものができますと取って代わられてしまふ。他のことについても同様です。確かに伝統文化となると保護するというのは大事なのですが、それだけではいけないと、守るだけではなく、日常の我々の生活の中に少しでも取り入れるような、親しみを持つようなことを考えないといけないのではないかと思います。

鈴鹿委員のおっしゃったようにお子さんが見て親しむようなことや、片山委員の小学校4、5年の子どもは親しみがあるというお話のように、小さいうちから見せる、聞くということがハードルを下げていく一つの何かなのかなと感じています。お茶も自分でたてて飲むということは、ここにおられる方は家に茶せんとお茶碗があるかもしれませんが、普通のおうちには、なかなか茶せんとお抹茶茶碗があっってお茶をたてようというのは珍しいこととなりますので、日常の中に「ちょっと一服お茶飲もか。」というような気軽なところに伝統文化というものが入っていくことをしないと保護するだけではどうしてもなくなってしまふ。なくなってしまうと、もう一度掘り起こすことは大変なこととなります。文化庁も京都に来られますが、前から文化庁の移転は二条城に行かばよかったのにな、と思っていたのですが、上段の間に長官が袴（かみしも）つけて「よう来たな。」と待っておられておられたらよいのにな、と。せっかく京都に文化庁が来られますので、もうちょっと親しみが与えられるようなスタイルを考えていけたらと思っております。

○ 豊田 まゆみ 委員（京都市地域女性連合会常任委員）

伝統芸能から外れるかもしれないのですが、私が小学校に勤めたときに「高学年は必ず京響の演奏会に行くことができずごいな」と、「高学年の担任は得だな」と感じました。また狂言なんか演劇鑑賞に取り入れたりしていて、他府県から来たものですから「やっぱり京都はすごいな」と。それを今もずっと続けておられます。今は茶道体験、華道体験

と、もっと多岐にわたって文化体験をしているというのは、先ほどからずっとお話に出ていますが、子どもたちが体験することによって心の隅にずっと残って、心の肥やしになるかもしれないと思います。

女性会では「みやこ子ども土曜塾」で茶道クラブをしている学区が多いです。女性会活動は地域に根差した活動ですので、地域に根差した伝統文化というものを地域の人たちと一緒に子どもたちと一緒に残していくという取組も大事なと思います。例えば、この時期であれば、あるところではしめ縄作りをするとか、あるところでは敬老会で六斎念仏をやるとか地域に根差した行事を地域に入ってやっている例も聞きます。子どもたちと共にやるとか、地域の人たちと共にやるということに私たちの活動の一つの意義があるのかなと最近、感じています。ただ、今年に限っては時代祭にも参加できませんでしたが、そういったものができるようになれば、また出ていきたいと思います。自分たちのやれること、例えば茶道なら家元の方のお弟子とかたちで行くのですけれども、子どもたちに伝えられるものが少しでもできればと思っています。



○ 櫻井 寿美 委員（市民公募委員）

大変、貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。皆さんのお話を伺っていて、今回、コロナで伝統文化だけでなく芸術全般がすごく大変な状況になってしまいました。そのときに、そういうものがなくても私たちは生きていけることは生きていけると実感したんですが、けれどもそれがないと人間らしい生活でないというか、必要ないんだけど、やっぱり必要なものということを改めて実感したかなと思いました。



今日お話のあった伝統文化についても、これから世の中がどんどんグローバルになっていって世界で国境のようなものがなくなっていく中で、なくなればなくなるほど、自分たちが日本人だと思えるのはやはり伝統文化だと思うんですね。これから10年、20年、30年後、世の中がどんどんボーダレスになっていったときにこそ、こういう文化とか伝統が日本人として必要なことじゃないかな、と思いました。

そこで自分に何ができるかという、受け手側の方のチャンスをちょっとでも作っていくということも必要ですし、生活の中で京都っていろいろ、この月はこういうことをするとか、おうちの中の行事っていうものを大切にしている家庭も多いと思うんですね。自分も一人の主婦として自分がすぐにできること、今月師走だったらこういうことをするっていうことをさりげなく生活の中に取り入れていくっていうことも伝統文化を継ぐということにつながるのではないかなと思いました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

京都に住んでいますと、四季折々の変化に自然に注意が向く。そういう環境に恵まれているな、と感じますね。私は北海道で生まれまして、京都とはまったく違う環境でしたから、その辺りは実感します。京都では夏になると地藏盆がありますが、最初の頃は意味がよくわからなかったのですが、子どもが健やかに育つことを祈る気持ちが行事の中に埋

め込まれているといいますか、そういうのは京都ならではの気がしました。これから大事にしていけないといけないところですね。

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

今日の議題は「伝統文化の継承」ということで、実は私の娘が漆をやっておりまして、もともと漆とは関係のない大学を卒業したのですが、卒論で漆を勉強しまして単に卒論で勉強するだけではつまらない、是非実際にやってみたいということになりまして、京都市の伝統産業技術者研修ですか、2年間のコースに入りました。そこで漆の勉強をして卒業したのですが、就職先がない。全くない。京都はお寺も多いので仏壇仏具に漆が使われていますよね。その修復の会社がいくつかあって、そういうところも厳しいのか、正規で採用してくれるところがなくてバイトスタッフのようなかたちで頑張って何年か仕事をしました。



その伝統産業技術者研修には京都の漆芸の偉い方の息子さんなんかもいらっちゃったそうですが、父親自身から家業を継ぐのはやめておけと言われるような状況だったそうです。本当に伝統文化の継承ということを考えるのであれば、若い人たちがその仕事に就ける環境を作ることが大変でなかなか厳しいですが必要だと思います。継承というと守るという話ですが、伝統工芸、漆なんかはいろいろな発展形があるんですね。ヨーロッパの方でも漆をやっている国があるようです。そういうことも含めた環境作り。伝統の本当にコアなところを継承しようと思うと相当広がりがないと成り立たないですね。これは自治体だけでなく企業も含めて、そして文化庁が来るということなので国のサポートも含めて求められます。娘に聞いていると漆をやりたいということで若い人たちが結構、専門学校に入ってくるそうなんです。娘が卒業してから10年以上たちますが、結局、漆で生計を立てている人は一人いるかいらないか。その一人というのはおうちの跡を継いだ方だそうです。身内の話をして恐縮ですが、うちの娘は別の仕事をしてから、やっぱり好きだということで、漆の技術をいかしてペンダントなんかを作っています。いろんなギャラリーに置かせてもらったり、細々とですが自分でインターネットのウェブサイトを作って発信したりして土日は好きでそれをやっています。もうちょっと若い人をエンカレッジ（勇気づける、励ます）する仕組みを作ることが大事じゃないかと、文化庁を迎えた京都が良いかたちを考えることが大事じゃないかと思っています。

○ 松岡 直子 委員（京都市小学校長会理事・京都市立祥栄小学校長）

本日は「伝統文化の継承」ということで、実は校長としての仕事がありまして「文化芸術授業（ようこそアーティスト）」というのを授業で実施しませんか、令和3年度にカリキュラムの中に入れませんか、というのがあってですね。先ほどからもお話がありましたように、体験こそ子どもたちの心を動かす一番のもので、伝統文化を2時間かけて30人の子どもたちに1単元でプロの方に直接教えていただける機会ですので是非と思うのですが、現場の方はいろいろなことをしないといけな



いので、それをカリキュラムに入れる校長もいれば、来年はちょっと難しいということも実際にはあることはあります。私個人としては、文化芸術というのはこれからの子どもたちを育てていく上で、本当に大事なものだと思います。本校も一人に1台タブレットが入りますので GIGA スクールも推進していく一方で、これからの子どもたちが生きていく上で心の豊かさとか潤いとか人生の楽しみとか深みを感じるためには文化に触れるということは必須のものだと思っているので、そういう体験というものも両輪で大事にしていく必要があると感じています。

話が変わるんですが、日曜日の何チャンネルだったか私もわからないんですけど、京都の芸能を特集されている番組が毎週やってるんです。この頃、趣向を変えられて、昔は「歴史があるんです。」「何百年も続いているんです。」というのを前面に押し出していたんですが、この頃は京都の伝統的に続いているものの考えをいかして若いアーティストが自分たちの考えを入れてアレンジをして伝統をつないでいくというような内容に番組を変えていってらるんです。若い人たちにも芸能をつないでいってもらいたいという番組の意図が見えて、視聴者からしたら私は面白くなったなと思ったんです。結局、何が言いたいかといえば、小学生の頃から「かっこいい」という言葉はものすごく子どもたちに響くんですね。「憧れ」とかそういう部分はやっぱり感じさせて、先ほどもありましたように、若い人たちの考えも受け入れる器の大きさみたいなものが伝統芸能の方にもあって継承されていく、そういうことがお互いの歩み寄りも必要なのかなと。グローバルな世の中なので外国の方にも工夫を凝らせば京都、また日本の伝統文化を発信できるヒントがあるし、そういうことなんかは若い人の方が長けていたりするので、伝統的な考えと若い人のそういうものを合わせて新しいクリエイティブなものができないかと、お話を聞かせていただいて改めて思いました。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

時間の流れでいうと古いところに目を向けるだけではなくて、未来に向けての時間の中で伝統文化を考えると、若い人たちの感性を取り入れながら変わっていくという視点は本当に大事ですね。

安成先生、なぜ娘さんが漆に興味を持たれたのか、ということがきっかけだったんでしょうか。

○ 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

大学の卒論の先生がたまたま東京芸大を出られた方で、学校は全然芸術ではないのですが、伝統文化とかいろんなことを勉強させてもらって、その中に漆があったんですね。漆のことはほとんど知らなかったのですが、卒論で文献なんかを調べていたら、だんだん面白くなってきて、勉強だけじゃなくて自分でやりたい、ということで就職は一切せずに、私も京都にいますし京都で勉強すれば何かできるだろうと。若い人は伝統を守るだけだとなかなか人は来ない。先ほど言われたように伝統を使って新しいアートであったり新しいイノベーションであったりいろいろあると思うんですが。娘の場合は木目をいかして漆を塗っていく「拭き漆（ふきうるし）」という手法があるそうなんです。その「拭き漆」の手法でペンダントなんかを作っています。結構、外国の方に人気があるそうです。細々とですが好きなのでずっとやっています。小学校できっかけを与えるというお話が

ありましたが、意外と大学ぐらいでも新しいきっかけになるようです。

○ 園部 晋吾 委員（NPO法人日本料理アカデミー地域食育委員会委員長、山ばな平八茶屋若主人）

私、昨年、今年と料理屋の若手の会である京都料理芽生会の会長をしておりますが、会長を務める2年間でどんなことをやっていくかを考えるに当たって、伝統文化というものを何かしらつないでいくことができないかと考えました。料理屋はいろんな文化とつながっていますし、料理屋の中にもいろいろな文化が入り込んでいますので、そういう意味では日本の文化をつなぐことができないかということで、実は今年の9月に「親子の文化祭」ということで親子400人を招いて、華道、茶道、能、京菓子、京料理の5つの体験を1箇所で親子にしてもらおう、というイベントをずっと計画しておりました。京都市教育委員会さん等とも連携をさせていただいて、まさに9月6日に行く予定をしていたのですが、残念ながらこういう状況で難しいということで3月の段階で中止にいたしました。こういうことを考えておりました。



このイベントをするにあたって、「文化に触れる、文化をつなぐ」というテーマにいたしました。文化をつなぐには、まずは自分たちが文化に触れて、知っておかないといけないということで、我々会員に対していろいろな伝統文化の先生方、講師を招いて無料で講演会や体験をさせていただきました。そのときに私は、会員はもっと関心があるのかなと思っていたのですが、正会員は60名、賛助会員は40名、100名ほどの会で、昨年は4回させていただいたのですが、毎回20人ぐらいの参加で、そのうち半分が賛助会員でした。賛助会員は業者さんなので、料理屋が半分、業者の方々が半分というかたちで、業者の方からは「すごく勉強になった」という声を聞くんですが、料理屋の反応が弱かったのがすごく気になりました。そういったこともあり、自分たちももっと文化を知らないといけないと感じましたので、今年も4回、講演会を実施しようと思っていたのですが、こちらも同様に中止にいたしました。

このように、文化というのは、実はすごく難しいという思いがあるんですね。経験を積まないといけないことがたくさんあるのですが、経験を重ねていっても気付く前にしんどくなってやめてしまうことが多いような気がします。ですので、子どもたちに伝えるときにどういうことが必要かと考えると、事前の解説であったり、事前に気付くポイントを教えてあげることが大事じゃないかと思っております。そういった前知識や解説をして事前に教えてあげることによって入ってきやすくなると思います。

我々、たった1回のイベントで文化に関心を持つ人が増えるとは思っていませんでした。これによってきっかけ作りをしたかったんです。安成委員がおっしゃったように、ものごとにはきっかけがあると思うんです。それがどの時点であるかわかりませんが、きっかけ作りをすることによって、次に同じものに触れたときに、過去にしたことがあるとか、見たことがあるとすっと入ってくるんです。ですので、きっかけ作りをしたいと思って計画しました。

こういう時節なのでリモートということがすごく言われます。前にも申し上げたのですが、技術的なことであったり、やり方などは伝えられるのですが、空気感であっ

たり思いであったりというのは、ものすごく伝えにくいものじゃないかと思います。私もお雑煮のレシピの発信、リモートで料理教室等をしてはいますが、はっきり言って面白くないですね。リアルでやっているとお客さんの反応を見ながら食いつきが良かった部分はもっと深めてみようとか、そういうやりとりがあるので良いのですが、淡々とカメラに向かって料理をしているだけでは面白くない。ただ、今回、教育委員会さんとだしの取り方の動画を作成しました。これは学校の先生がだしをひけるようにするためのものですので、淡々と説明していても意味があると思います。ただ、その動画をそのまま子どもに見せてもダメなのです。子どもたちに伝えるには生きた言葉であり思いでありを乗せていかないと伝わらないと思います。リモートというのは導入としては良いと思うのですが、実際には距離を保ちながらでもリアルでやっていくのが大事ではないかと思います。

私はお茶の先生のもとで茶懐石をさせて頂いております。お茶事では通常、料理の取り回しや、お濃茶を一碗で全員が飲み回しをしたりします。それを今回、先生はどうされたかと言いますと、先生がたてられた一碗のお濃茶を、例えば5人のお客さんだったとしたら、先生がその場で5つのお茶碗に取り分けられて出されました。また、本来ならお客さんが「お任せを」と亭主から器を取り上げてお客さんの方で取り回していくということが起こるのですが、先生は「亭主が取り分けます」と言って、すべて取り分けされたりと、形はいつもと違いました。先生がおっしゃるには「形が変わっても、もてなすということ自体に変わりはない。そこを大事にするのであったら形は変わっていてもよい」とおっしゃっていました。どんなやり方でも正解はないし、自分のやっているやり方を周りの他の先生もされるかどうかはわからない。ただ自分はこういうやり方が良いと思ってやっている、というのが今のコロナの時代の一つの流れなのかなと思います。我々がやっていることも良いか悪いかはわからない。正解もないですが、自分たちがこれで良いと思ってやっていくことが大事なのではないかなと思います。

○ 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市 PTA 連絡協議会会長）

いろんな小学校、中学校で文化体験させていただいてありがたいなと思っています。子どもたちも体験すると晩御飯の時に楽しかったとか感想を聞かせてくれます。私が子どもの頃はおそらくこういう取組はなくて、あまり記憶もないので文化に触れる機会はなかったかと思います。清水寺の森委員には怒られるかもしれませんが、京都の人は意外と京都の有名なところには行かないので、他府県の方が詳しくたりするぐらいです。当時、高度経済成長で親も家におらず、親子で出かけて見学するというのも今のようになかったもので、京都について



知る機会もあまりありませんでした。榎木委員がおっしゃったように着物を着る文化もそういった中でだんだんと廃れてしまったのが、我々が子どもから大人になる時代だったのかと思います。そういうことで大人の方が文化、芸術について知識や興味がないという部分がありますので、今一度、生涯学習ということで大人が京都を、そして文化、芸術を見直していかないといけないなと思っております。私も校長先生にお願いして小学校の子どもたちと一緒に観世会館の方に行かせていただきまして、改めて日本の文化って

良いなと思い、学びなおしたいなと考えております。やはり「親子で」というのがキーワードかなと思いますので、親子で行くことによってそういった見聞のようなものが徐々に蓄積されていくのではないかと考えております。

○ 片山 九郎右衛門 委員（観世流能楽師）

おっしゃっていただいたことで3つほど気が付いたことがありますと言っておかないと、と思いました。一つは学校を回りましたときに私どもにやれることは少ないんです。結局、見せるもの、カリキュラムは自信を持って作っているのですが、子どもたちに受け止めてもらうためには、子どもたちの学校の先生への信頼感というのはやはりすごいものがありますので、ここのパイプの部分でどんな興味を持った先生が担当してくださるかその日に成功するかどうかが決まってくる部分があります。昨年まで文化庁が予算化してくれていた事業で私どもの法人が行っていたんですが、和歌山で学校の先生のためのサマースクールみたいなものをやらせていただいていた。ところが文化庁、文科省の予算がカットになってしまったので今年は持出しでやったんですが、京都でもやっていたら効果的だと思っています。御両親と一緒に行かれるのが一番なんですけれども、それが難しいときには、やはり学校の先生が一番信頼関係を作っていってほしいのが一つです。

もう一つは先ほど、漆の話で私も同じような経験を何度かしているのですが、西陣に昔、悉皆屋（しっかいや）さんというのがございました。悉く（ことごとく）全部やるという意味でいろんな職人を集めて全行程を責任を持って管理する役割です。去年、NHKの番組で洋服なんですけども洋服の職人さんも今、困っていらっしゃるということで、その職人さんを組織してインターネットを使っていろんなところから集めてやっておられる、これがすごく成功しているという話でした。これは文化庁では何人かしか顔が見えていませんので、やるとしたら京都市さんかと思います。しっかりとどんな技術を持っておられるかを把握して、これをマリアージュできると職人さん不足や新たな仕事というの、ひょっとしたら解決とまではいかななくても、何か動いていくのではないかと思います。

それと海外への発信のことをおっしゃっていただいたのですが、独立行政法人の国際交流基金というのは京都支部というのが唯一あって、京都支部にもフェローシップ（研究奨学金）というので海外の方から何人かいろいろな出身の方が日本に留学してきておられる。そのフェローシップでもいろいろな体験があるんですけども、意外に京都市内でも我々のところには回ってこれないんです。そういう文系は文系ということではなく、理系の方でも、工学でもなんでもよいのですが、いろんな体験をしていただいて本国に帰っていただく機会を推奨していただくことができれば、もう少し地道な、毎年そういう方が何人かずつ帰っていかれるわけですから、国際発信の一つの助けになるのではないかな、と思っております。

○ 吉川 左紀子 議長（京都芸術大学（旧名称 京都造形芸術大学）副学長）

京都には大学がたくさんありますし、海外から留学生を積極的に招いているところもありますから、留学生が来たときに伝統文化に触れられるような、学びのコースのようなものが京都独自にできると良いですね。そして京都はそういうことができる場所なのかなという気がしました。

○ 廣岡 和昇 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

伝統文化を含めて様々な体験学習というのは非常に大きな経験になると思います。今、コロナ禍で、京都には非常に良い伝統文化がたくさんあるのですが、時代祭の行列であったり、大きな祭り、あるいは地域での行事というのがコロナの影響で全て中止になってしまっている。私たちの小さいころは、外で遊び、川で遊んで自然のものを採って、それでものを作り、ただで遊んでいたという時代ですが、今は家にこもってネットで遊ぶというかたちになっていますから、子どもにとっても体験の場というのは、少なくなってきています。兄弟が3人、4人という家庭も増えてきているかもしれませんが、子どもの数も少子化ではありますから、やはり学ぶということは学校に限られている部分があります。そういう意味では京都には自然の中で学ぶところもまだまだたくさんありますし、そういったところが学校の体験というかたちでつないでいくことが非常に大事だと思いますので、本日説明のあった内容も引き続きやっていただけたらと思いますし、私たち大人が無償でそういった場を提供していくことができれば、是非とも催していきたいと思っております。



○ 石川 一郎 委員（京都新聞社論説委員長）

今日は皆さんからいろいろなお話をお聞きし大変勉強になりました。私自身は伝統文化と言えるかわかりませんが弓道を20年ほどやってきております。弓道の竹弓や竹の矢、あるいは「かけ」という道具を右手にしますがこういうのはだいたい伝統的に手作りの技が生きているところです。今日、お話をお聞きして一つの文化の背景にいろんなもの作りがあるということで、私もそういう世界にちょっと足を突っ込んでいるのかなと思いました。ただ、それ以外の弓道の例えば着物ですとか帯、あるいは弓巻きという弓を巻く木綿の布がありますが、それは外国産であったりするので、なかなか伝え手がないと伝統産業が育たないと、皆さんのお話をお聞きしながら感じた次第です。



今日の片山委員のお話にありましたけど、例えば学校で能楽の取組をされると、子どもたちの目が輝いて、ということでした。私もかつて能や狂言の舞台を集中して拝見した時期があったんですが、例えば能には身体表現の部分、あるいは能の歴史についての知識、それから謡本は古典の知識、囃子（はやし）については音楽の素養、衣装は美術的なセンスがそれぞれ必要かと思います。これが学校の教科として考えたら、体を使う部分は体育、歴史は社会科であるとか、古典の知識は国語であると細分化されてしまうんですが、出前授業だとトータルとして子どもたちの心に入ってくるのではないのでしょうか。片山委員がトータルシアターとおっしゃいましたが、伝統芸能のトータルパフォーマンスみたいなものを子どもたちが感じるから、非常に食いつきが良いのかな、と感じました。伝統文化の奥深さというか総合性の部分を伝え手、学校での伝え手は大人ですけれども、大人の側が認識を改めないといけない、というふうに思いました。

■ 報告1 京都市次期基本計画のパブリックコメントについて

○ 配布資料 京都市社会教育委員会議での意見（令和2年3月26日）

○ 事務局から

- ・京都市の今後5年間の基本的な計画を定める「次期基本計画」であるが、パブリックコメントを実施した。
- ・社会教育委員会議では、今年3月の会議で配布資料のような御意見をいただいていたところである。
- ・計画の策定にあたっては、御意見全てという訳ではないが、反映できる部分は反映させていただいている。

【主な反映部分】

- ・ 人生100年時代を見据え、豊かな人生の実現と、生きがいを持って暮らせる社会の創造の双方の観点から、生涯学習のまちづくりに取り組むこと
- ・ 障害のある人など、あらゆる人々の学びの機会を創出すること
- ・ 高齢者の豊富な知恵と経験を生かし、世代間が互いに学び合うこと
- ・ 伝統文化など京都ならではの多彩な資源を取り入れること
- ・ ICT（情報通信技術）も活用していくこと 等
- ・また、京都の生涯学習は、本市のあらゆる政策分野を融合することとしており、大学政策や文化など、様々な分野でも同様の趣旨は反映されているところである。
- ・文言として反映できなかった部分についても、今後、教育委員会が事業を実施していくにあたり、大切な視点としていかしていきたいと考えている。
- ・基本計画がどの程度達成されているかを、指標やアンケートを基に把握、公表し、今後に生かすため「政策評価」を実施している。
- ・政策・施策ごとに数値目標を定めており、「生涯学習」という政策に対しては、「京都のまち全体で創りだされる生涯学習情報（講座・イベント等）の数」と、「京都市図書館入館者数」を具体的な数値目標にしている。
- ・今から10年前、平成23年の講座数は2,290だった。そこで10年後に講座数を3,000にするという目標を掲げ、取り組んでまいった。最新の数値は6,778となっている。一部のイベントがダブルカウントされてしまっているが、その分を差し引いても倍以上には増えており、評価は「a」となっている。図書館入館者は若干減っており、「b」評価となっている。
- ・また、政策の市民生活における実感を市民アンケートにより調査しており、そちらも評価がされている。
- ・これらを総合的に評価し、「生涯学習」としては「B」評価（政策の目的がかなり達成されている）となっている。
- ・施策（「学びが社会に還元されるしくみづくり」等）についてもそれぞれ評価がされている。
- ・今回基本計画が新しくなるに伴い、こうした数値目標も新たにすることとなっている。
- ・こういった指標が必要ではないか等あれば、是非、御意見をいただきたい。

■ 報告2 「京（みやこ）まなびいニュースレター」について

- 配布資料 京（みやこ）まなびいニュースレター
 - ・市民の皆さまの学びのきっかけとして、京都市の生涯学習情報をお届けしている。
 - ・今回は安成委員に「コロナ禍から気候変動の取組を学ぶ～「緑の回復」をめざそう～」と題してコラムを御執筆いただいた。
 - ・次回は鈴鹿委員にコラムの執筆をお願いしている。
- 安成 哲三 委員（総合地球環境学研究所所長）

コロナ禍からの社会・経済の回復は、気候変動対策、地球温暖化対策、脱炭素の取組と、いかに同時に達成するかという方向で考えないといけない、ということを書かせていただきました。

■ 報告3 令和2年度京都市生涯学習市民フォーラムについて

- 配布資料 令和2年度京都市生涯学習市民フォーラムについて
 - ・11月12日に立命館大学朱雀キャンパスで、会場定員の半分以下の入場者数とするなど、感染症対策を行い実施。
 - ・シンポジウムでは妙心寺退蔵院の松山大耕副住職にお越しいただき、松本絃生涯学習市民フォーラム会長と、門川市長の3人で「新しい生活スタイルと文化～ウィズコロナ時代の心の持ち方～」について鼎談。
 - ・来場者からは「ピンチをチャンスととらえ、自分のために何もできないときは、人のためにできることをみつきたい」などの御感想をいただいた。
 - ・当日の様子は「京（みやこ）まなびネット」で動画を配信予定。

■ 主催事業 及び 刊行物の案内・説明

- 事務局から
 - ・今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から動画で発信された「第23回京都市PTAフェスティバル」についてPTA しんぶんで紹介している。
- 大澤 彰久 委員（平成30年度京都市PTA連絡協議会会長）

通常ですと国際会館で約5,000名のPTA会員の皆様、児童、生徒が集まって開催しているのですが、やはりこのコロナ禍で、大人数で一堂に会してのPTAフェスティバル開催は難しいだろうということで、なんとか違ったかたち、新しいかたちでPTAの活動を発信できればということになりました。教育委員会の皆様とも知恵を絞りながら、なんとかYouTubeで動画配信をして、日頃の活動をお伝えさせていただきました。

動画につきましては、私もこの上の永松ホール（総合教育センター4階）で和太鼓をさせていただきました（安朱小学校おやじの会による和太鼓演奏）。和太鼓は普段、地域の中で神社さんやお寺さんの秋祭りであったり、もみじ祭りやさくら祭りであったりと披露させていただいているんですけども、今年はなかなか地域行事ができないということで、これをきっかけにまた皆さんに元気を与えられる活動ができればということで今回、出させていただきました。

皆さんそれぞれ、学校での撮影であったり、読み聞かせも自分で撮られたり、実際に永

松ホールにいられてされたり、いろいろ工夫を凝らしながら日頃の活動成果の発表をしたり、皆さんに勇気と元気を与えられるような活動をお届けしたいということで、YouTubeで発信をいたしました。京都市内の5校種、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、総合支援学校それぞれの様子も写真で見られますので、お時間が許せば是非御覧になっていただければと思います。

■ 閉会（吉川議長）

■ 閉会挨拶（大黒生涯学習部長）